

科学系博物館の学校利用促進方策－教員の ミュージアム・リテラシー向上プログラム－

(財)科学博物館後援会 高安 礼士

1. 調査研究の名称

(財) 新技術渡辺記念会委託事業：「科学系博物館における学校利用促進方策 一教員のミュージアムリテラシー向上プログラム開発－」

2. 調査研究の目的

本研究では学校教育で重要な「学習指導要領」と「博物館における各プログラム」の関係を再検討し、学校利用促進のための条件を提言する。さらに学校利用のみならず広く一般の利用者の立場に立った今日的な「博物館利用」の在り方、すなわち「ミュージアムリテラシー」に根ざした科学系博物館における教育普及活動を調査研究し、学芸員養成科目の履修内容（「学芸員の持つべき学校教育リテラシー」）を提案する。

3. 研究協力者及び実施期間

研究協力者名簿

| | | 氏名 | 所属 | 役職 |
|----|------|--------|-----------------------------|--|
| 1 | 研究代表 | 高安 礼士 | (財)全国科学博物館振興財団 | 公益事業課長 |
| 2 | | 芦谷 美奈子 | 滋賀県立琵琶湖博物館 | 研究部博物館学研究領域 主任学芸員 |
| 3 | | 一條 彰子 | 東京国立近代美術館 | 企画課教育普及室 主任研究員 |
| 4 | | 大木 真徳 | University of Leicester | PhD Student, School of Museum Studies |
| 5 | | 小川 義和 | 国立科学博物館 | 事業推進部 学習企画・調整課長 |
| 6 | | 亀井 修 | 国立科学博物館 | 事業推進部 連携協力課長 |
| 7 | | 黒岩 啓子 | Learning Innovation Network | 博物館学研究者 |
| 8 | | 齋藤 有里加 | くにたち郷土文化館 | 学芸員 |
| 9 | | 佐々木 秀彦 | 東京都美術館 | 交流担当係長 |
| 10 | | 菅井 薫 | お茶の水女子大学大学院 | 人間文化創成科学研究科 文化科学系 |
| 11 | | 鈴木 みどり | 東京国立博物館 | 博物館教育課教育普及室 主任研究員 |
| 12 | | 永島 絹代 | 夷隅郡大多喜町立老川小学校 | 教諭 |
| 13 | | 並木美砂子 | 千葉市動物公園 | 飼育課主査 |
| 14 | | 西村 徳行 | 筑波大学附属小学校 | 教諭 |

(五十音順・敬称略)

実施主体: 国立科学博物館内 財団法人全国科学博物館振興財団(科学博物館後援会)
実施期間: 平成21年11月1日～平成22年10月31日

4. 所要経費について

調査研究費 1,500千円

・予算は独立行政法人国立科学博物館の財務規則に準じて執行した。

(詳細は参考資料の「予算執行の概要」を参照ください。)

5. 調査研究の実施内容

本研究を開始するに当たり、「科学系博物館の学校利用促進方策—教員のミュージアムリテラシー向上プログラム開発—」調査研究委員会を設置して、平成22年2月13日から10月30日までの間に計6回の研究会と関東・関西地区及びシンガポールの博物館インタビュー調査を実施し、提言として報告書をまとめた。

<研究調査会及び関連調査等の実施経過>

| 調査会 | 開催日時 | 開催場所 | 内容等 |
|----------|-------------|-------------|-----------|
| 第1回調査研究会 | 平成22年2月13日 | 国立科学博物館 | 調査研究の方針 |
| 第2回調査研究会 | 平成22年3月13日 | 国立科学博物館 | 博物館利用現状把握 |
| 第3回調査研究会 | 平成22年6月13日 | 国立科学博物館 | 教員の能力開発 |
| 美術館研修会調査 | 平成22年7月27日 | 千葉県立美術館 | 教員研修会調査 |
| 美術館研修会調査 | 平成22年7月26日 | 東京国立近代美術館 | 教員研修会調査 |
| 関東地区調査 | 平成22年8月～9月 | 府中市, 入間市など | 博物館調査 |
| 第4回調査研究会 | 平成22年9月4日 | 滋賀県立琵琶湖博物館 | 教員研修の実態調査 |
| 関西地区調査 | 平成22年9月4/5日 | 伊丹, 大阪, 橿原市 | 博物館調査 |
| 第5回調査研究会 | 平成22年10月15日 | 科学技術館 | 教員フォーラム |
| シンガポール調査 | 平成22年6月13日 | シンガポール | 博物館調査 |
| 第6回調査研究会 | 平成22年10月30日 | 国立科学博物館 | 編集会議 |

6. 研究の成果と提言

(1) 学校教育の博物館利用の現況と課題

実態調査からは、行政機関としての「博学連携」の大きな枠組みや制度の整備、バス利用などの交通機関の整備、学習プログラムにおける教員と学芸員の役割分担の共通理解などがそれぞれの段階における課題と認識できた。

- ① 学校の博物館利用に関しては、遠足等の学校行事による利用や社会科見学・総合的学習での利用はある程度行われているが、「博物館の利用の仕方」や「生涯を通じて博物館を利用する導入学習」「教員自身の授業研究のための利用方法」等の「利用のためのオリエンテーション」が行われていない。
- ② 博物館資料の利用や学芸員の活用に対する期待はあるが、具体的な手法については一部の教員の利活用に限られている。
- ③ 教員の博物館活用に対する知識・理解が進んでいないため、「学校に不足している学習教材や分野」に対する要望のみが高い。
- ④ また、博物館利用に対する学習効果を疑う声も教員経験10年未満の教師に多い。

これらの原因の一つに「博物館の学びと学校教育の学び」の質の違いがある。今回の調査でわかったことの一つに「体系的に学ぶ」ことはどちらも必要なことであると考えており、「課題発見・解決型の学習」の必要性はどちらも認めていることなので、このことなどを連携の中心概念として考えることが解決の糸口になると考えられる。

(2) 博物館における学びの特質

博物館の学びの特質は、「体験的な学び」「自主的な学び」「非集団的な学び」「生涯学習としての学び」と考えられる。博物館は学校教育とは異なり、幅広い年齢層の学びが展開される点が特徴である。訪れる人は様々な年齢であり、また多様な経験を持っている。このような人々の多様性を考慮する必要がある。人々の人生に比較し、ほんの一瞬の博物館体験の影響はごくわずかであるが、博物館の体験はその後のより深い理解の土台を提供しうるものである。

(3) 教員の持つべきミュージアムリテラシーの体系

ミュージアムリテラシーとは、「何らかのコミュニティに属するミュージアムと教員・利用者が、(1)相互のルール・役割・道具(資源となるものごとや考え方)の内実を理解し、互いに働きかけを行うことであり、(2)それぞれの活動の境界を越えた働きかけを通じて育まれ、蓄積されていく活動の在り方・考え方の形態である」とした。

教員のミュージアムリテラシーとは、教員個人が博物館を利用する知識・スキルとともに「教員としての資質能力」をも必要とするものであり、その意味では「社会リテラシー」を必要とするものであるが、ここではそれらの様々な資質能力のうち、ごく基礎的な部分に限ることの重要性を認識した。そのような意味で、教員養成課程の中で行うべき点も多いと思われる。ここでは、現職教員の行うことのできる研修や仕事上で向上させることのできる「教員のためのミュージアムリテラシー」を提案した。

詳しくは報告書を参照してください。